夜間パトロール'84冬

釜ケ崎キリスト教協友会（以下協友会と略）を中心とするキリスト者は今年も夜間パトロールを行った。キリスト者が釜ケ崎越冬支援を始めたのが一九七四年であるから、'84年の冬で11回目を迎えたことになる。12月25日から1月15日までは労働者のグループ第15回釜ケ崎越冬闘争実行委員会の夜間医療パトロールの支援を行い、1月16日からは協友会が中心となって夜間パトロールを行った。

四二五名の青カン（野宿）者

12月31日から1月3日までは、世間ではめでたい正月休み。しかし釜ケ崎ではアブレ（失業）地獄だ。日々雇われることによって収入を得る日雇労働者にとって、求人数ゼロの年末年始はまさに冬地獄。仕事がない→金がない→青カンを強いられる。今年の越冬でも1月2日に青カン者数はピークに達し四二五人が青カンした。日頃から青カンに慣れている人たちは布団や毛布の中で寝ているのでまず安心だが、この期間は青カンをあまり経験したことのない人が多い。商店街ののき下で毛布も防寒着も持たずにうずくまっている人たち、寒さを紛らわすために一気に酒を飲だいきおいで路上で寝ころんでいる人たち、そんな人たちと出会う。彼らは凍死する率が最も高い。今年も1月7日までに20数名が行路病死した。明け方の最も冷え込む時に、あるいに酔いが覚めた時にコロッといってしまうかもしれない。彼らは仕事がある普段ならドヤ（簡易宿泊所）で寝ている人たちだ。胸が痛む、と同時に怒りが湧く。この事実に無関心な世間に、仕事をまた宿まる所を保証しない行政に、そして何もできない自分に対して。とにかく、とりあえず声をかけ、必要な人には毛布を渡す。「おっちゃん、大丈夫ですか。」「大丈夫や、ご苦労さん。」歩けそうな人には医療センター前の仮の宿（軒下に布団を敷いて寝る）か三角公園のたき火を囲んでの夜営地に行ってもらう。酔って寝ている人は風があまりふかない所まで運んで毛布をかける。

毛布を受け取らない人もいる。作業着と地下足袋だけで路上にすわっている人に会う。防寒着も毛布も持っていない。「毛布いりませんか。」「いらん。ほっといてくれ。大丈夫や。明日は仕事に行くんや。」こういう時、「働き人」として生きるホコリに気づかされる。キラキラしたものを感じる。また、パトロールが終ったあとぐっすり寝むることができる自分は何者なのかどう答えるのか、という問いをつきつけられる。

シノギ追放のパトロールを警察が弾圧

昨年の12月は仕事が多く、年末まで飯場で働き、正月に備えてある程度お金を持って釜ケ崎に帰ってくる労働者が多かった。ところがドヤの収容人数は限られており、年末にはすでにドヤは満室。お金を持っていてもドヤに泊まれない労働者が少なからずいた。彼らは仕方なく大金を持って青カンする。寝ている間に彼らを襲い金を盗むのがシノギと呼ばれる路上強盗である。1月1日には公園で青カンしていた人がシノギに殺される事件が起きた。五万円や十万円以上の金を盗られた人

もいた。警察に届けに行っても「お前が悪い」と逆に説教され、何もしてくれない。

自分たちの命と金は自分で守るしかないということで、労働者はシノギ追放の人民パトロールを行った。釜ケ崎とその周辺をみんなで歩きシノギを追い出した。すると警察は人民パトロールに弾圧を加え、労働者になぐる、けるの暴行をあたえ、3名は救急車で運ばれ、2名が逮捕された。釜ケ崎は日本の縮図であると言われる。だとすれば今回の越冬におけるパトロール弾圧は、日本の社会がいま急速に戦前のような警察国家に向かっていることを示してはいないだろうか。

協友会の夜間パトロール

協友会を中心とするキリスト者のパトロールは1月16日から2月28日まで毎晩行なわれた。釜ケ崎日雇労働組合が越冬闘争を終り春闘に入ったのを引き継いだ形だ。喜望の家に11時30分に集合しオリエンテーションをしたあと、毛布、カイロ、救急箱、軍足、みそ汁、雨が降ったときはシートを持って釜ケ崎とその周辺を約一時間半パトロールする。1月16日から2月28日までの間にパトロールに参加した、のべ人数は八五四人、一日平均19人だった。

越冬委員会が解散したため、前回の越冬では準備や活動が不充分であったという反省の上に、今回は協友会の中に越冬小委員会が'84年の10月に組織された。越冬小委員会では行政への働きかけ、支援物資・カンパの要請、パトロールの内容などについて話しあった。

ここ数年クリーン作戦という町をきれいにしようという運動が警察をリーダーとして行なわれている。その結果、青カン者は「浮浪者」であり「汚ない」から釜の外へ追い出せという運動が広がっている。軒下やガード下には鉄板で囲いがされ、歩道橋の下には有刺鉄線でバリケードが張ってある。数年前まで青カンできたところが青カンできなくなっている。そこで越冬小委員会は、多くの人が釜ケ崎の外で青カンしているのではないかと考え、天王寺公園、阿倍野斉場、参加者に余裕があるときは日本橋までパトロールを行うことにした。

1月16日から2月28日までの平均青カン者数は釜ケ崎地域で一一六人、天王寺公園と阿倍野斉場は合計で平均四四人であった。

パトロールの第一の目的は凍死、餓死等の行路病死者を未然に防ぐことである。緊急に診察の必要な人を見つけたら救急車を呼ぶ。今回救急車を呼んだ回数は12回。そのうち入院できた人は5人。治療のみの人は7人。シノギにやられた人は傷の手当だけで放り出されるケースが多い。遠くの病院まで連れられてすぐ追い出されることもある。彼らは金を取られているので歩いて釜ケ崎まで帰らなければならない。救急車を呼ぶのも慎重にしなければ労働者にかえって大きな迷惑をかけることになる。救急車で運ばれた人は次の日にどの病院に運ばれているかチェックした。入院できた人には下着などを持って行った。

比較的軽い病気やケガの人には、簡単な治療をし、朝9時に炊き出しの会が行っている医療相談に行くことをすすめ紹介券を切った。しかし、医療従事者がほとんどいなかったため投薬や診察はできないことが多かった。実際、医療活動はほとんどできなかった。前回までの夜間医療パトロールという名称も夜間パトロールに変えざるをえなかった。この点は今後の課題である。医療相談への紹介券発行数は80枚。そののち医療相談にいった人は14人で一七・五%、医療相談に行かないため同じ人に何回も発行したこともあった。常時青カンしアルコールで粉らわしている労働者へのケアーの問題も今後の課題である。

パトロールに参加して

１９８５年1月１６日から2月２８日まで，釜ケ崎キリスト教協友会は，午前１２時から約1時間野宿（青カン）する労働者をたずねる夜間パトロールをした。これはその参加者の感想である。

弱者と強者

高島　勇吉

カトリック田辺教会の福祉活動委員の呼びかけで、このパトロールに参加する様になって今年で早や三年目を迎えました。参加当初は、路上で青カンしている人たちとは、どの様な事情による人たちなのかを色々と想像したものでした。所が、今年あたりは、その様な事は余り気にならなくなり、寧ろ、去年いた人たちが、まだいるのではないだろうか、と言った事を考えたりしたものです。週に一度、回数にして、ほんの六～七回程度の参加ですので、青カンしている人たちの顔などをはっきり覚えている訳ではないのですが、一年ぶりに参加するにしては、妙に情が湧いて来たのは、どういう事なのでしょうか？

全く肩を張らずに参加できる様になった事自体、釜ケ崎のあの独特の風土を多少、肌で理解できる様になったのかも知れません。

物質文明のみを追いつづける現代社会では弱者と強者の存在が、何んとなく認められ、それが当り前の様になっているのが、誠に残念なのですが、恐らく、来年も、また、さ来年も、今までと同じ様に、夜間パトは続けられるのでしょう。〝青カンをしている人が、一人でも二人でも減っていく〟そんな社会の実況を皆で心を合わせて祈りたいものです。

「どうどうめぐりでっせ」

大学生　高見　忍

あるパトロールの夜、一人の労働者の私たちに語った言葉の中に「こんなんしてもどうどうめぐりでっせ」という言葉があった。どうどうめぐりとわかっていても、そのどうどうめぐりがなかったらどないもならん、そのどうどうめぐりが必要だという現実があると思う。自分自身パトロールに参加しながら何もしていないという事を感じ、それと同時に自分は一体何をしているのかという問いを受け現実をまともに見ながらいろいろな思いをめぐらし自分を否定しなくてはならないのかという気持ちになりながらもぬくぬくとふとんでねる。今、自分達に必要とされている事は自分の不利になる事自分の幸福を阻害する事には目をつぶり、自分さえ幸福であれば良いというような安易な自己中心的な考えではなく、言わなあかん時には言う、せなあかん時にはするという勇気を持つ事だと思う。この事が必要であり、この事が問われているのは自分自身であると実感している。

格差

シスター　高橋由美子

私の勤務する学院では、昨年の秋、特別教室棟が完成しました。引越の時、釜ケ崎の労働者と思える数人が重たい机を運んでいました。声をかけようかとためらっているうちにその機会を逃がしました。もう翌日には、彼らの姿は見られませんでした。

今年も越冬の季節が訪れ、例年通りパトロールに参加しました。何度か参加するうちに今、生徒達が活用している教室の建築工事に携わった労働者達も野宿しているのかと思うようになりました。そして、自分達の生活と労働者達の生活を描きだす時、それぞれの方

法で社会に参加しながら、これほどの格差が生じるのかと、社会のひずみを教えられるのでした。

現状を前にして、どうすることもできない自分達の無力さに、言葉にならない憤りを覚えた越冬パトロールでした。

怒り

園田　克也

昨年の事を思えば、わりと温い冬だったにもかかわらず、やはり外で青カンするには厳しい冬である。

今年のパトロールで怒りを感じた事件のひとつは、救急車を呼んだ時であった。センターの前で病人を発見したため、すぐに一一九番に電話した。「釜ケ崎キリスト教協友会の園田ですが、センター附近に病人がいますのでよろしくお願いします。」と言ったところ、以外にも次のような言葉が返ってきた。「あなた達の活動には理解できますが、当方はいつも何でもない患者のためにいちいち呼ばれて大変迷惑しています。患者さんは本当にどこかが悪いのですか?」あきれて、しばらく言葉が続かなかった。

実際に今まで救急車で運ばれた患者は注射一本で病院から追い出されたり、もっとひどい場合は病院に着く前に途中で救急車から降される場合もある。いったいこの人達は人間の命を何だと思っているのだろうか。

とにかく、人を物やゴミのような存在にしか思わない行政に対して強い怒りを感じた冬であった。

「あ、ここにはキリストがいる」

高三　川上小百合

初め、きょろきょろしながら歩いていましたが、何一つ変化はありませんでした。三角公園まで行った時、とても多くの人々がおられました。「20人ぐらいだったかナァ?」

私達が行くと、土の上にねている人や、火のまわりでしゃべっている人々がおられました。私達が近づいて行くと、足が痛いとか、お腹がへった、とか言う人がおられました。

結局、私達のしたことは、公園におられた人々に毛布を配り、けがをしている人には手当をし、お腹のすいている人々にはおみそしるを与えたんです。

感想ーはじめ私はものすごくこわかった。心の中では、「何かされるのではないか?」という気持ちでいっぱいでした。又、道を歩いていると、とてもアンモニアくさかったし、とても道がよごれていることにビックリしました。

私は、公園にいる人々を見た時、「あ、ここにはキリストがいる」と思った。その瞬間私の頭の中には、イエス様がいわれた「あなた達は私が飢えていた時食させ、のどがかわいてた時に飲ませ……」（マタイ25・31～46）という言葉を思い出しました。釜ケ崎の人々と話しすると、とてもやさしかった。あの人達は誰よりも心から優しい人達だと思いました。キリストがいわれたように「心の貧しい人は幸い、天国は彼らのものである。」とは、まさにこの釜ケ崎のことばであると思いました。私は、「こわい」と思ったことがとてもはずかしいです。それは、この人々を身なりで判断したからです。

「釜ケ崎とは何か」ということを問う時、まさにこの問題は「差別問題として取り上げるのが一番だと思います。差別問題は、人間の心の貧しさの問題であり、差別することは差別される側の問題よりも差別する側の問題と思います。釜ケ崎という町は、自然発生した町でなく、「つくられた町」であるということがわかりました。どこの仕事場にも属さないで毎日違った働きをしているという労働者が、社会から人間あつかいされていないということから、「つくられた町　」といってもいいと思います。今まで私は、「この人達と違うんだ」とか、又「愛する」ということは何かをしてあげるという上下関係であると思って来ました。でも、「愛する」ということはどれだけその人々を理解するかそのためには、心において、又実生活において、同じ苦しみをあじわうことが大切だと思います。私は、今まである意味で恵まれた生活をして来ましたが、「知らないことは罪だ」という言葉の重みを心の中に感じました。私はとても勉強になり、ここへつれて行って下さった玉造教会の有馬神父様に心より感謝しております。

越冬セミナー報告

一九八四年度「第10回越冬セミナー」は、'84年12月31日～'85年1月3日まで、ふるさとの家、旅路の星、喜望の家を会場に開かれた。テーマは、「いま、釜ケ崎で」。セミナーの様子を日記風に委員会にまとめてもらった。

12月31日（月）

今回の越冬セミナー参加者は、女性8名、男性14名の、計22名。例年は、10～15名程で行われているのですが、応募者が、何と、40名近くにも達した為、このような人数になったと言う訳です。参加者の背景は、なかなか多彩で、サラリーマン、看護学生、医学生、カトリックの神父、シスター、プロテスタントの牧師、学校教師…と言った人達が、北は東北から南は九州まで、「全国津々浦々」より、集まって来ました。

「ふるさとの家」で、午後2時半より受付、大きな鞄を下げた人達が、続々とやって来ました。開会礼拝は、このセミナーの責任者、KUIMの前島牧師が担当。「ふるさとの家」の礼拝堂で行われました。「初めて、プロテスタントの牧師による礼拝に出席し、有意義だった。」との、カトリック信者の参加者の声もありました。確かにここ釜ケ崎では、「エキュメニズムが実際に、活き活きとしている感じがします。

オリエンテーションの後、宿泊施設である「喜望の家」「旅路の里」に荷物を移し、各自、自由に釜ケ崎の街を、歩く時を持ちました。

夕食は、会食と言う形で、「ふるさとの家」で、カレーライスを頂きました。

夜のプログラムは、「青カンの夏58釜ケ崎」と言うビデオを一緒に見た上で、話し合いの時を持ちました。何人かの参加者から、活発な質問、意見が出されました。越冬と言う、限られた枠にとどまらない「釜ケ崎の一年」を、映像を通じて感じることができたのではないかと思います。

夜10時からは、越冬パトロールに参加。（今回は、前述のように多人数なので、3日間に分かれて参加して貰いました。）何人かは、夜の警備にも残って頑張りました。

1月1日（火）

一九八五年の幕明け。参加者は、昼過ぎまで、様々な活動に、分かれて行きます。四角公園での炊き出し、喜望の家の古着のバザー等々…。食事も、地域の中で、自由にとって貰います。午後3時からのプログラム、「釜ケ崎の一年」は、KUIMの小柳先生の担当。「釜ケ崎の10大ニュース」を共に考えると言う興味深いものでした。

夕食後は、釜ケ崎日雇労働組合の久保さんの発題。主に、越冬闘争の歴史に関するものでした。丁度、今回の越冬は、例年のように、医療センター前に蒲団を敷いて後、夜間パトロールを行うと言う形から一歩進んで、「労働者自身の、闘う越冬」が打ち出されていました。まず、午後8時より、労働者、支援全体で、釜ケ崎中を、シノギ（路上強盗）撃退の「人民パトロール」を行い、その後、午後10時よりパトロールを行うと言うものです。また、「二拠点」制がとられ、身体の元気な労働者は、センター前には寝ずに、三角公園で、組合の人や支援の人達と共に、焚火をしながら頑張りました。こう言った形態に至るまでの闘争の積み重ねが、久保さんによって語られました。

1月2日（水）

この日は、丸一日、諸活動への参加です。炊き出し、協友会のスタッフと共に病院訪問喜望の家のバザー、娯楽室の手伝い等々…また、この日は、三角公園で、もちつき、演芸大会など、様々な催し物が行われ、それに参加したり、見物したりした人も多かったようです。

また、夜のプログラムがない為、「人民パトロール」にも、何人かが参加しました。例年と越冬の形態が変わったと言うこともあって、警察による弾圧は、ことの他厳しいものだった為、越冬セミナー参加者も、権力とのぶつかり合いを、まのあたりにした筈です。実際に、機動隊と衝突して血を流す労働者の姿に触れての、「いい体験をしたではすまされない。」との、参加者の声がありました。

様々な角度から、一人一人の参加者が、釜ケ崎の現状に接した一日だったようです。

1月3日（木）

あっと言う間に、3泊4日のこのセミナーも、最終日を迎えることになりました。この日は、朝から参加者全員に、レポートを書いて貰いました。皆さん緊張の連続で、すっかり疲れ切っていたと思うのですが、それぞれに自らの、4日間の印象を書いて下さいました。

越冬セミナー　　於ふるさとの家

レポート書きが終わった後は、最後のまとめの討論です。ここでも、活発な意見交換が試されました。「労働者は、どうしてあんなに言葉づかいが丁寧なのだろうか」と言った驚きの声を契機に話が進んだり、会社、或いは学校、教会など、自らの「現場」と、釜ケ崎での体験とを結びつけての意見が出される等、有意義な話し合いだったように思われました。

ただ、参加者が多人数だったせいか、積極的に発言する人が、ある程度、限られている感じが、若干しました。勿論、そんなに発言しなかった人達も、（発言した人達も）言葉にならない、様々な思いを、内に秘めていたことと思いますが。

討論の後、恒例の、「ふるさとの家」の御厚意による、「おせち料理」の会食、今年は人数が多いので、「ふるさとの家」の食堂でなく、2階に料理を運びました。

閉会礼拝は、旅路の里の薄田神父が担当、それぞれに、別れを惜しみながら、釜ケ崎の地をあとにしました。

参加者の中で、特に体調を崩す人もなく、無事、4日間のセミナーを行えたことは幸いでした。プログラムは、短期間なので、ぎっしりと詰まっていた面もあったかも知れません。けれども、参加者一人一人の「積極的な姿勢」で、セミナーがつくられて行ったように思います。様々な機会に、多くの参加者が労働者と接し、考えていたことは、一人一人のレポートに、はっきりと表われています。

また、セミナー期間中、セミナー委員以外の多くの協友会のスタッフの方々が、忙しい時間を割いて、プログラムに参加して下さったことも、大変良かったと思います。

このセミナーでの体験が、参加者一人一人の、それぞれの場に於ける歩みの中で、何らかの形で活かされることを、願って止みません。

（文責　横山）

協友会通信1

1984年冬

釜ケ崎キリスト教協友会

代表　薄田　昇

連絡先　〒　大阪市西成区萩之茶屋3―1―10
ふるさとの家内
釜ケ崎キリスト教協友会連絡事務所
☎〇六―六四・―八二七二

カンパの送り先　振替番号　大阪六―二〇五五九九
釜ケ崎キリスト教協友会

協友会の活動にカンパを

冬を迎える釜ケ崎

本年三月十七日土曜日の夜をもって、第十四回釜ケ崎越冬闘争支援活動は終りました。その間に、みなさまが示して下さいました寛大なご協力には、今尚感謝の念を新たにするものがあります。ありがとうございました。

所で、今年は異常気候が続き、四月末まで寒さが残り、しかも夏の暑さは九月末までも続いてしまいました。寒さの中で、暑さの中で日雇労働に従事している労働者の姿には頭の下るものがあります。一方機械化が進む中に、働きたくても仕事がなく、宿るところもないために、炊き出しの列に加わり、軒先で夜を過している労働者、特に高齢者、病弱者、障害者の姿の増えているのをみるとき、痛ましさと同時に、これは誰の責任かと思わず考え込まされてしまいます。

私たちは今冬も〝一人も死者を出すまい〟と第十五回釜ケ崎越冬支援活動を展開してまいりますので、よろしくお願い致します。

仕事のない人に仕事を！

釜ケ崎に生きる約二万人の日雇労働者たちにとって〝仕事がない〟ということは、何よりも〝生〟の保障がなされていない〟といっても過言ではありません。

釜ケ崎のこうした日雇労働者たちが、年間を通して〝半〟失業状態を強いられていることは、「白手張」所有者の「アブレ手当」の支給を待つ、毎朝の「あいりん職安」での労働者の列が、それを物語っています。

不況の長期化や「行革」のあおりを受け、民間・公共の建設工事は減少を続けていることは周知の通りですが、早朝四時・五時といった時間に、就労する意志を有し「寄せ場」(労働市場)に出掛けていっても〝仕事が無い〟といった状況が、毎年繰り返され、ことに日雇労働の求人数は年末から年始にかけ激減し釜ヶ崎に生きる約二万人の日雇労働者たちにとって、文字通り「死活問題」となっています。

釜ヶ崎においては、大阪府・大阪市の行政当局が、「越年対策」と称して「臨時宿泊所」の開設を毎年この時期に実施致しますが、真に労働者の〈声〉が生かされた対策とはいえず、ここ数年来、この施設も縮少を続けているのがその実情です。

さらに、高齢・病弱・障害……といった心身に「ハンディ」をもった労働者の現状は厳しく、その日その日をどう生きるのか？という問いを私たちに投げかけてくるのです…。

釜ケ崎に生きる日雇い労働者たちは、前述した如く、年間を通して〝半〟失業状態を強いられ、例年、年末から年始に至る期間、収入源の保証を失い、大衆食堂に支払う〝メシ代〟や簡易宿泊所の〝ドヤ銭〟さえ払えぬ、という苦境に追い込まれるのです。

私たちは、こうした現実が生ずる原因は、〝仕事が無い〟という事実にあると考えます。

大阪市・大阪府のみならず国に対しても釜ケ崎をはじめ、東京・山谷、横浜・寿、名古屋・笹島といった全国の「寄せ場」に生活する仲間とともに「仕事の無い人に仕事を！」と要求していかねばなりません。

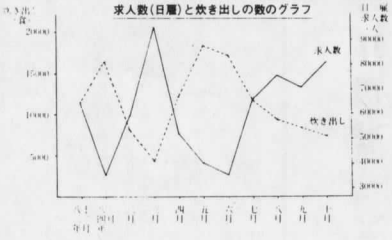
食のない人に食を！

日雇労働者は、仕事がなければ当然その日の食事にも事欠くありさまになってしまいます。労働者自らの手による〝炊き出しの会〟では、一年三六五日休むことなく炊き出しを続けています。越冬期間中（十二月～二月）は一日三回炊き出しをしますが、その合計は三万六二六五食で、正月三日には一日で千食を越してしまいました。越冬が終っても月間約一万食の炊き出しを続け、昨年十二月より今年の十月末までに炊き出した数は一二万四六五八食となりました。一日平均お米十五キログラムです。協友会では今年も全面的にこの炊き出しの会を支援してまいりましたが、みなさまのご協力で集められたお米は約千五百キログラムで全体の三分の一強に当ります。このためにお昼のおかずを梅干しで節約して下さった学校もあり、又「一握り運動」が実を結んで来たことを有難く思っています。

食のない人には食を。今冬も又みなさまの一握り運動をよろしくお願い申し上げますと同時に、次の表が示しますように、仕事が増えれば炊き出しの列に並ぶ人の数も正直に減ってまいります。私たちの目的は炊き出しをすることではなく、どうすれば炊き出しをしなくてもよくなるかということです。

一九八四年～八五年活動目標

①仕事のない人に仕事を
②食のない人に食を
③宿のない人に宿を
④病気の人は病院に
⑤協友会の活動の充実



炊き出しの数は炊き出し会による。1983年12月から1984年2月までは一日三食、以後は一日二食。求人数は労働福祉センターによる。求人数が減ると炊き出しの数が増えることに注意！

宿のない人に宿を！

大阪市民生局は釜ヶ崎労働者の越年対策として、九七一年より臨時宿泊所を設け、お金がなく宿のない労働者を年末から年始にかけ宿泊させています。しかし、行革＝福祉切り捨て路線のため民生局は越年対策をここ数年大幅に縮少してきました。一九八〇年には二二二三人収容していたのですが、一九八二年には一三七七人、昨年はなんと八八八人しか収容しませんでした。こうして多くの収容、保護を必要とする労働者が切り捨てられていったのです。

お金があって宿に泊まれる労働者が増えたために臨時宿泊所の収容人数が減ったのではありません。このことは野宿せざるをえない労働者が前回の越冬と比べて一日平均一〇〇人増えたという事実が示しています。特に今年の一月二日には過去最高の五八五人（前年より二〇〇人増）もの労働者が寒い冬の空の下で野宿を強いられました。

真冬に野宿せざるをえない労働者は行路病死の危機にさらされています。前回の越冬期間中（一九八三年十二月～一九八四年一月）においては、釜ヶ崎周辺で五〇名もの人が行路病死しています。年間を通じても、一九八三年には、前年より約一〇〇名増加し、二三三名の人が行路病死しています。

一九八四年四月の調査では、簡易宿泊所のドヤ銭の平均額は八八九円でした。しかし、今年の八月の雇用保険法の改定に伴う失業手当金の増額、関西新空港関連工事に伴う求人数の増加が予想されるため、多くのドヤが建てかえを始めました。一泊最低二五〇〇円のドヤが増えています。病弱・高齢の労働者の生活は、ドヤ銭の値上げによって、苦しくなっています。

越冬期間においては死への危険に直面している宿のない人に宿が提供されるよう、わたしたちは行政・市民生局に強く訴えます。しかし、今年も野宿に追いこまれる人は多くでるでしょう。「一人の死者も出すな」を相言葉にわたしたちは夜間医療パトロールをおこないます。

病気の人は病院に！

行革の目玉商品として健康保険制度が変り、それに伴って日雇労働者の健康保険制度も一般の健康保険制度の「日雇特例被保険者」となりました。このことについて社会保険事務所は「保険給付を受ける要件や保険料を納める方法など、基本的しくみは、これまでの制度とほぼ同じですが、変った主な事柄は、次の通りです」と云って「本人の医療費一割負担」とさらっと云いのけていますが、この本人の一割負担とは基本的なしくみが変ったのと同じなのであります。更に云えばこの変化によって治療を続けられない労働者も続出 しています。例えば、A病院は結核病院ですが、日雇健康保険で入院している二十数名の中、三名がすでに十月中に治療費が払えなくて退院しています。勿論生活保護に切り替われば継続治療は可能となりますが、日雇健康保険で入院している労働者は、あくまでも退院後労働を続けたい意志を持っている人なのです。従って生活保護に切り替えるなら彼らの持っている労働意欲を取り上げることになるのです。ある病院関係者の中には、この改正は改悪であり、日雇健康保険つぶし以外の何ものでもないと云う人さえいます。つまり日雇保険が生活保護に切り替えられていくなら、日雇健康保険の持主が少くなる。そこで少くなったから廃止しようということになるだろうというのです。

日雇労働者の医療費一割負担が一日も早く廃止されるように、皆さまのご協力をお願いします。

釜ケ崎キリスト教協友会

一昨年まで越冬支援活動をして来たキリスト教越冬委員会が解散し、釜ヶ崎キリスト教協友会一体となって、活動を強化して行くことになりましたことは昨年の越冬報告でお知らせいたしました。

協友会は、釜ヶ崎においてキリスト教精神にもとづき、社会福祉労働福祉の向上を目的として活動するエキュメニカルな団体です。

いこいの家（日本キリスト教団）
　労働者のための「いこい食堂」差別問題
喜望の家　山王こどもセンター（日本福音ルーテル教会）
　断酒会、地域の学童保育
暁光会（カトリック）
　廃品回収を中心にした労働者の共同体
ふるさとの家（カトリック）
　老人センター。生活相談地域内の教会
関西キリスト教都市産業問題協議会釜ヶ崎委員会（プロテスタント諸教派）　地域に於ける都市産業問題
旅路の里（カトリック）
　病弱労働者の社会復帰活動
こどもの里（カトリック）
　地域のこどもの遊びを通しての保育
キリスト教釜ケ崎生活相談室（アッセンブリーオブゴッド教団など）
　ケースワーカーによる移動相談活動
愛徳姉妹会（カトリック）
　労働者の衣服修理、病院訪問　生活相談

協友会は釜ケ崎の日雇労働者の自立をめざし、本年度の活動目標に取組んでまいりますが、そのためには予算が必要となります。みなさま、一千万円カンパにご協力下さい。

越冬支援のためのお願い

今冬も越冬期間中、夜間パトロールを行います。前半十二月二十五日から一月半ばまでは、労働組合の人々と共に行動し、その後二月一杯、必要に応じて三月の半ばまで協友会が中心となって行います。その期間中、毛布、蒲団、防寒着、オーバー、靴下などが必要となってまいります。みなさまのお手許にありますもので送って戴けますものがあるようでしたら、十二月二十五日以後に着くように、暁光会宛てにお送りください。

557　大阪市西成区北津守四―四―四四
　　暁光会大阪支部
　　電話（〇六）五六二―〇〇八六

協友会通信2

1985年冬

釜ヶ崎キリスト教協友会

代表　薄田　昇

連絡先　557　大阪市西成区萩之茶屋3－1－10
ふるさとの家内
釜ヶ崎キリスト教協友会連絡事務所
☎〇六－六四一－八二七三

カンパの送り先　振替番号　大阪六－三〇五九九
釜ヶ崎キリスト教協友会

釜ヶ崎越冬活動にご協力を！

越冬支援中間報告

はじめに

新らしい年を迎えたばかりと思っているうちに、二月の声をききました。一九八四年釜ヶ崎越冬活動の支援の呼びかけにみなさまが寛大に応じて下さいましたことを心から感謝申し上げて居ります。カンパの方は一月末をもって目標額に近づき、衣類、防寒具、蒲団、毛布、お米も日本全国から送って戴きました。一人一人に受取りのお礼状を記すのが当然でありますが、人手不足のためにお礼状をお送りすることの出来なかった失礼をお許し下さい。越冬闘争も後半期に入り、一月十六日からは協友会の活動として続いて居ります。毎晩百名を越す野宿労働者、どうぞ全員無事に春を迎えるようにお祈り下さい。

平和をふみにじる足音

今年も釜ヶ崎キリスト教協友会は、越冬闘争の前半を第15回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会と共に闘った。支援行動とはいえ、クリスマスから始まる活動は、キリスト教徒にとって意義がある。イエスが馬小屋に生れたのは、聖書によれば「宿るところがなかった」からであるが、年末年始にアオカンを強いられる労働者が増えるのも「宿るところがなかった」からである。暮の30日・31日まで飯場で働き、釜ヶ崎に帰ってもドヤが満室で断わられている労働者の姿を見るのは辛い。行政はどうして年末年始にも窓口を開かなかったのか。

協友会は、毎年この頃越冬ゼミを行い今年は22名参加した。参加者が一番ショックを受けたのは、三角公園で夜明かす労働者を機動隊が囲み人民パトロールを力で規制したことだった。彼らはパトロールや警備に参加しながら「何故警察は…」という疑問が頭から離れなかった。最近までフィリピンで活動していた修道女は「この警察力を見て怒りと不安を感じた。」といった。この警察力の強化はそのまま日本の軍事化につながっているのではないか。

午後10時半、交替のため隊を整え勝ち誇る兵士の如く引き上げる機動隊の足音は、平和をふみにじる靴音に聞こえてくる。

薄田　昇（日刊えっとう1月14日号より）

卓球大会

対市抗議デモ（1月4日）

越冬を前に大阪市に要求書

私たちは釜ヶ崎（行政の言うあいりん地区）で生活している労働者住民で構成している第15回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会です。

越冬闘争開始（70年初め）当時釜ヶ崎は〝医療・福祉は皆無〟と言ってよい状態であり、膨大な「行路病人・死亡人」は年間約三、〇〇〇名にものぼるような状況でした。それに対し、釜ヶ崎労働者の闘いが始まりました。

大阪市当局は80年度までは南港臨時宿泊所宿泊者数を増やすといったように受身的に限られた対応を序々に拡大をしてはきましたが、一方においては、「越冬闘争を担う主体とは話し合わない」「労働者は南港へ治安隔離する」という方向をとってきました。また79年以来の就労ダウンに対し、それとは逆対応し、国政の行革に屈服迎合し、「切り捨て」路線を選び強化してきました。南港臨時宿泊所でさえ、一昨年はこれまでの二、〇〇〇名前後から一、三七七名に切り落し、ついに昨年は八八八名しか入所できませんでした。（これは、アオカン者の激増＝死者の激増としてはっきり現われており、まさに「殺人行政」その

ものと言えるものであった）

また、昨年12/25～12/26までの越冬実の保護総数は八、九四一名となり、市の臨泊宿泊者総数六、六七一名を一気に抜きさりました。

昨年をもって、まさに時代は越冬闘争初期段階まで戻ったのです。即ち、市当局は私たちに対し「行政はやることはやっているのだから越冬実とは話しはしない。」と言いつつ、厳寒の路上に多くの労働者を放り出し、切り捨てて、抹殺していこうとしているのです。私たちは仲間の〝死〟を黙って見すごすことはできません。

市当局は、〝当事者＝労働者・越冬実〟の要求を聞き、話し合い、対策をやらねばなりません。

私たち越冬闘争実行委は、今第15回越冬斗争前に大阪市民生局に対し、以下の要求を行ないます。

記

一、(イ)釜ヶ崎地区内もしくは、近辺に収容力二、〇〇〇名の宿泊所を建設せよ。

(ロ)今越冬期は希望者全員を臨時宿泊所へ入所させよ。（一切差別をするな）。

(ハ)ドヤ券・食券を越年対策として希望者全員に配布せよ。（越冬越年期アオカン者をなくせ）。

(ニ)12/29～1/3までは最低限臨泊受付を行なえ。

(ホ)全ての病弱・高齢「障害」者の冬期保護を越冬前に行なえ。

(ヘ)宿泊施設から鉄条網をとりはづし、民主的な運営を宿泊者との話し合いで行なえ。

二、(イ)3/4～5/31までの長期アブレ期に対し五〇〇名以上の宿泊所を常設せよ。

(ロ)宿泊所建設までは食券・ドヤ券を支給せよ。

三、健保改「正」、日健廃止に対し、高齢者「障害者」低所得者の医療費一割負担は大阪市が肩代りせよ。

以上

一九八四年12月15日

第15回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会

のどじまん大会

やはり厳しい釜ヶ崎の冬

第15回越冬闘争実行委員会と協友会が要求書について大阪市民生局と昨年12月に交渉したとき、民生局は一、三二〇人規模の臨時宿泊所を用意すると言いましたが、実際に入れた人数は約七五〇名でした。施設、病院に収容された人の数を含めても九〇〇名です。この結果、ピーク時には四二五名が野宿を強いられ（一月二日）、八一七人が炊き出しに並ばざるをえない状況でした（一月三日）。釜ヶ崎周辺の行路病死数も昨年十二月から一月前半までですでに20数名を数えています。このような形で行政改革に名を借りた大阪市の福祉切り捨て政策が如実に表われています。

みんなで闘った越冬

仲間の「死」を黙って見すごすことはできないと、労働者、支援の人たちは不眠不休で斗いました。野宿者のために社会医療センターの軒下にふとんをしき〈仮の宿〉をつくり、路上強盗がこないように徹夜で見張りをし、早朝から病気の人は入院できるように医療相談をしました。賃金未払い、労災もみけしをなくそうと労働相談、労働争議を行い、情報宣伝の新聞を毎朝発行しました。「炊き出しの会」は雑炊の給食を毎日、朝昼晩の三回続けています。

わたしたちキリスト教のグループも微力ではありますが布団しき、夜間医療パトロール、徹夜の警備を支援してきました。また、炊き出しへの援助も続けています。

今回の越冬の特徴は年末年始（12月29日～1月3日）に三角公園を拠点とし、昼は集会や文化活動、夜はみんなでたき火をかこんで野宿したことです。多くの労働者が臨時宿泊所に入れなかったことに対する抗議集会が持たれ、年末には年越しそばを食べ、正月にはのどじまん大会、卓球大会、もちつき大会、支援による朝鮮舞踊、寸劇などが三角公園で催されました。また年末年始に多発する路上強盗から野宿者の身を守るためのパトロールが行なわれ、毎夜約二〇〇人の労働者が参加しました。

支援物資の配布

自分自身は泊まるドヤを確保しながらも困っている仲間の役に立ちたいと諸活動に参加する労働者も多かったです。みんなで団結してやっているんだという熱気と連帯が感じられました。この熱気と団結は労働条件をよくしていく春闘に必ず生かされるでしょう。

閉鎖される炊き出し公園

「炊き出しの会」が雑炊の給食を行っている公園が二月～三月末まで改修工事のため閉鎖されます。このことを知った炊き出しの会の労働者が大阪市公園局と交渉した結果、公園の一部を炊き出しに利用できることになりました。しかし、炊き出し活動は大きな制約をうけることになりました。釜ヶ崎には四つ公園があるのですが、そのうち二つは既に閉鎖されており、これで三つの公園が閉鎖されることになります。

越冬活動支援のお願い

釜ヶ崎キリスト教協友会は、夜間パトロールを二月末まで毎日、行ないますのでご参加ください（午後11時30分に喜望の家に集合）。夜間パトロールについてのお問い合わせは旅路の里（☎〇六―六四一―七一八三）にお願いします。炊き出しへのご支援もよろしくお願いします。三月十七日午後六時よりふるさとの家で越冬総括集会を行ないますのでご参加ください。

一九八五年二月十日

協友会へのカンパ支援心から感謝します。

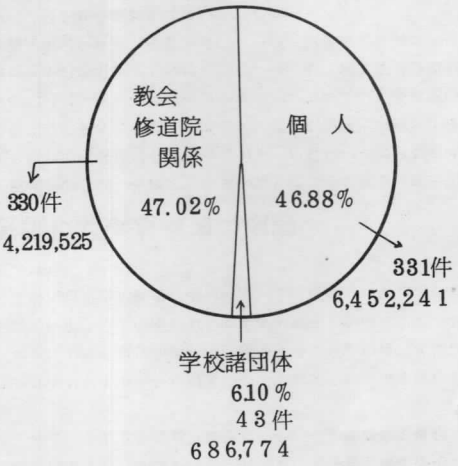
1984年 冬から1年間の協友会活動への支援を全国の教会・修道会・学校・個人等に訴えたところ，総計704件の方々から11,348,540円のカンパがありました。ご支援を心から感謝いたします。カンパは，越冬をはじめ年間を通じて協友会が釜ケ崎で活動するために使用させていただきます。また，カンパの内訳（地域・個人・学校諸団体・教会修道会）は表の通りです。全国のみなさんが，釜ケ崎のことを心にとめ，カンパをよせてくださったことにあらためて感謝いたします。

（会計　谷）

カンパ支援

1984年4月～1985年3月末

総計　704件　11,348,540円



地域	個人		教会・修道院		学校・諸団体	
	件数	%	件数	%	件数	%
大阪市内	58	17.52	43	13.03	5	11.62
近畿	128	38.67	144	43.64	17	39.53
中国	19	5.74	31	9.40	3	8.97
四国	6	1.81	21	6.37	1	2.33
九州沖縄	21	6.34	54	16.37	14	32.56
東海	9	2.72	3	0.90	—	—
関東	59	17.83	24	7.28	1	2.33
東北	12	3.63	6	1.81	—	—
北信越	10	3.02	1	0.30	1	2.33
北海道	9	2.72	3	0.90	1	2.33
合計	331	100%	330	100%	43	100%

編集後記 '84

今回の越冬も、厳しいものが続きました。

その中にあって、キリスト教協友会も、皆様の援助により頑張ってきました。しかし、大変な事態である事は、変わりません。しかし、その中でも、うれしいニュースがあります。それは、喜望の家が新しくなることです。この新しい喜望の家が、また、越冬パトロールの為にも大いに、その役目を果してくれることを願っております。

（T）

●

'85釜ケ崎越冬報告書を出版しようと編集委員が最後の打合せをしているとき、医療センターの本田良寛先生の逝去のニュースが伝わって来た。七月一日午前五時五十八分、釜ケ崎は又惜しい人を失ってしまった。昨年来やつれがひどく心配をしていたが、こんなに速くその日がくるとは考えてもいなかった。日雇い労働者だけでなく、キリスト教協友会も随分お世話になった。一人一人の良き相談相手であった。先生のご冥福を心から祈りたい。先生本当に長い間ご苦労さまでした。夫れ夫れの日雇労働者を親身になって診察され、行政と戦いながら赤字財政のなかで医療センターを支えられお疲れになられた事でしょう。これから医療センターの前を通るときは淋しく思うことでしょう。それ以上に釜ケ崎のよき理解者を失ったことで不安も感じます。でも残されたものの手で先生の遺志をついでがんばりたいと思っています。

合掌（S）

●

ドヤの新築ラッシュです。昨年は旅路の里の隣りにホテル・サンが新築、今夏は向いに六階建てが建ちます。いずれも古いドヤ時代は二階でした。新築と同時に値上げ。二帖一間で一日、一五〇〇円～一八〇〇円です。一ケ月二帖で四万五〇〇円から五万四千円です。

久し振りに釜ケ崎に顔を出した友人がドヤの新築ラッシュに驚いていました。一方、路上で寝なければならない人も急増です。釜ケ崎周辺だけでも二〇〇～三〇〇人です。大阪市内でも一〇〇〇人を越えると言われます。四月～七月にかけて仕事が激減するからです。落ち込みは冬期以上です。その証拠に炊き出しに並ぶ労働者は、朝夕の二回で九〇〇人を越す日が何日も続きました。ちなみに越冬期の最高は、朝夕の計三回で八一七人です。その列は、炊き出しを続ける萩の茶屋中公園を出て西成警察をぐるっととり囲みました。仕事があるときは、炊き出しの列も一日一〇〇人を割る日々でした。釜ケ崎では、やはり根本に仕事の問題があります。去る7月1日、釜ケ崎日雇労働組合が、大阪府に「仕事よこせ」とデモをしました。大阪府は、行革で公共事業どころではないと、冷たく言いはなちました。

こんな中で、行路病者・死者もふえています。背後には、昨年10日の医療保険の「改悪」10％負担が大きく作用しています。仕事なし、保険が利用できない。かりに保険を利用しても10％がなかなか支えない。だから病気が重症になってから病院へ行く。思うように入院も出来ない。行路病、病死とつながります。労働者の病気とたたかった本田良寛さんも7月1日逝去。7月6日には、社会医療センター葬があり、労働者が一〇〇人近く参加しました。またピンハネを合法化する労働者派遣事業法もいよいよ実施されます。7月は暑さ以上に釜ケ崎の労働者には厳しい季節です。

（Q）

協友会通信３　釜ケ崎１９８４年越冬

●発 行 日　１９８５年８月１日

●発 行 所　大阪市西成区萩ノ茶屋２－８－９
旅路の里気付

●編　　集　「協友会通信３」編集委員会

●印 刷 所　㈲　木村桂文社

●頒　　価　　３００円